

病害虫発生予察情報(2月予報)

平成 28 年 1 月 27 日
静岡県病害虫防除所長

1. 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：並 (発病株率 0.8%) (但し、東部・中部地域：並) (西部地域：やや多)	1月中旬発生量：少(－) 東部・中部地域：少(－) 西部地域：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率 0.8%)	1月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.3%)	1月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率 17.1%)	1月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (寄生株率 3.1%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+)
トマト	灰色かび病	発生量：多 (発病株率 4.0%)	1月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：多い(+)
	疫病	発生量：やや多 (発病株率 0.4%)	1月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：多い(+)
	葉かび病 すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 17.5%) 但し、一部多	1月中下旬発生量：少(一部多)(+) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：多い(+)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：多 (発病株率 2.4%) タバココナジラミ発生量：多 (寄生株率 2.3%)	1月中下旬発生量 黄化葉巻病：多(+) コナジラミ類：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
タマネギ	腐敗病	発生量：並 (発病株率 0.6%)	1月下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	灰色腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 0.04%)	1月下旬発生量：並(発生なし)(－) 気象予報：降水量：多い(+)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率 54.9%)	1月下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(－)
レタス (非結球レタスを除く)	べと病	発生量：多 (発病株率 0.1%)	1月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	腐敗病	発生量：多 (発病株率 0.4%)	1月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	斑点細菌病	発生量：多 (発病株率 0.0%)	1月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2. 予報の根拠と防除対策

【イチゴ】

<生育の概況>

第一果房の収穫はほぼ終了し、第二果房が開花～結実の生育状況で、平年よりやや早い。

うどんこ病

予報の根拠

- ・1月の巡回調査では、県全体の平均発病株率は0.5%（平年1.1%）と平年より発生は少なかった。但し、地域別にみると東部地域では0.0%（平年0.8%）、中部地域では0.4%（平年1.9%）、西部地域では1.0%（平年0.5%）と西部地域において平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く、降水量は平年より多い予想で、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除く。
- ・今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

灰色かび病

予報の根拠

- ・1月の巡回調査では、発病株率は0.3%（平年0.5%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く、降水量は平年より多い予想で、ハウス内は多湿になりやすいため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下50 cm以上）に埋めるなどして適切に処分する。
- ・朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

アブラムシ類

予報の根拠

- ・1月の巡回調査では、平均寄生株率は1.4%（平年1.5%）で平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・発生に注意し初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシのマミーの発生状況をよく観察する。アブラムシ類が多発した場合は、アブラムシ類とハダニ類の両方の天敵に影響のない薬剤を選択し散布する。

ハダニ類

予報の根拠

- ・1月の巡回調査では、平均寄生株率 20.9%（平年 16.1%）で平年よりやや多い発生であった。ハダニ類の発生は、ほ場により大きく異なり、多発生ほ場もみられた。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生の中に防除を徹底する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、農薬のローテーション散布を心がける。化学農薬の効果が低い場合には、気門封鎖型薬剤も活用して防除する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類、天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。
- ・ハダニ類とアブラムシ類の天敵を利用している場合は、両方の天敵に影響のない薬剤を選択し散布する。

アザミウマ類

予報の根拠

- ・1月の巡回調査では、県平均寄生株率 1.0%（平年 2.3%）で平年に比べ少ない発生であった。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発生するほ場では、開花初期に防除を徹底する。
- ・ハダニ類とアブラムシ類の天敵を利用している場合は、天敵に影響のない薬剤を選択し散布する。

<その他の病害虫>

炭疽病

1月の巡回調査では平均発病株率は 2.3%（平年 0.4%）と平年より多い発生であった。本病菌は 25～30℃の比較的高い気温を好む菌である（生育温度 6～32℃）。したがって、例年は気温の下がる 12月～2月にかけて発生は少なくなるが、本年は 12月中旬～1月中旬にかけて平年より気温が高く推移したことから、潜在感染株が発病し発生が多くなったと考えられる。発病株や発病した植物の残渣は伝染源となるため、ほ場を注意深く観察し、葉柄基部やランナー等に浅くへこんだ黒い病斑がみられたり、クラウンの褐変を伴う萎れ症状、もしくは株の枯死などがみられた場合は、速やかに抜き取り、抜き取った株は放置せずハウス外に持ち出し土中深く（1m以上）埋めるか、焼却処分する。罹病した育苗用親株は育苗期の重要な伝染源となるため、特に注意する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや早い状況である。

灰色かび病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率 9.8%（平年 2.9%）、発生面積率 53%（平年 22%）と、平年

より多い発生であった。多発生の施設や発病が茎に及んでいる施設も確認された。

- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く降水量は平年より多い。降雨時はハウスを密閉しがちで多湿になりやすいため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下50 cm以上）に埋めるなどして適切に処分する。
- ・朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生をいちじるしく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

疫病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率0.1%（平年0.3%）と、平年並の発生であった。しかし、防除員からのアンケートでは、「やや多い」との回答が志太榛原地域、中遠地域、西部地域で得られている。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く降水量は平年より多い。降雨時はハウスを密閉しがちで多湿になりやすいため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除きハウス外の土中深く（地下50 cm以上）に埋めるなどして適切に処分する。

葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率11.3%（平年21.5%）と平年より少ない発生であったが、発生面積率は53%（平年43%）と平年よりやや多く、中遠地域では甚発生の施設も確認された。
- ・1か月予報では、2月の気温は平年より高く降水量は平年より多い。降雨時はハウスを密閉しがちで多湿になりやすいため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は伝染源となるため速やかに摘み取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では、12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率 5.5%（平年 2.6%）と平年より多い発生であった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率 4.4%（平年 3.2%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、2月の気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野生生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させ、黄色粘着トラップを設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【タマネギ】

<生育の概況>

生育は平年より 7 日程度進んでいる。

腐敗病

予報の根拠

- ・ 1月下旬の巡回調査では、平均発病株率 0.8%（平年 2.9%）と平年よりも少なかった。
- ・ 本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすく、気温が高いと感染・発病が助長される。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため本病の発生に適している。

防除対策

- ・ 傷んだ葉がある場合は、降雨の直前直後に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 1月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年平均発病株率 0.04%）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状が現れることがあり（ボトリチス葉枯症）、ボトリチス葉枯症の平均発病株率は 4.2%（平年 0.6%）と平年より多かった。
- ・ 本病は多雨で発生が助長されるが、1か月予報では降水量は平年より多いため、本病の発生に適している。

防除対策

- ・ 降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。薬剤の選択に当たっては病害虫防除基準（URL：<http://www.s-boujo.jp/>）を参照する。

- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は37.4%（平年53.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、2月の気温は高いが、降水量は多いため本種の増殖にあまり適していない。

防除対策

- ・例年、2月中旬以降気温が高くなると増殖が盛んになり、寄生密度が高まる。このため、密度が高まる前に防除を実施する。成幼虫ともに株元の葉と葉の隙間に多く寄生しているので、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は例年より10日～14日程度早い状況である。

べと病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率8.7%（平年1.2%）、発生面積率60%（平年13%）と平年より多い発生であった。特に、中遠地域では、平均発病株率14.8%（平年1.3%）、発生面積率75%（平年16%）と平年より非常に多い発生であった。
- ・本病原菌は生育適温10～15℃と比較的低温を好み、降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、1月の気温は平年より高いが降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病が多発してからでは薬剤の効果が劣るので、予防に重点をおいた薬剤防除を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺で多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では注意する。
- ・高湿度下で蔓延しやすいため、トンネル被覆後は過湿にならないよう換気に努める。
- ・発病株は見つけしだい早めに抜き取り処分する。

腐敗病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率2.0%（平年0.3%）と平年より多い発生であった。
- ・病原細菌の生育適温は25～30℃と比較的高温を好む。1か月予報では、2月の気温は平年より高く降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は主に収穫期に感染し収穫が遅れると被害が急増するため、収穫適期を逃さないようにする。
- ・本病の発生は特に凍霜害によって助長される。トンネル内に不織布等でべたがけを行い、保温性を高め凍霜害を軽減する。

- ・トンネル内が過湿にならないように換気に努める。

斑点細菌病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率 18.8%（平年 0.8%）と平年より非常に多い発生であった。
- ・病原細菌の生育適温は 26～28℃と比較的高温を好む。1か月予報では、2月の気温は平年より高く降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌数を減らすことが大切である。
- ・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・本病の発生は特に凍霜害によって助長される。トンネル内に不織布等でべたがけを行い、保温性を高め凍霜害を軽減する。
- ・トンネル内が過湿にならないように換気に努める。

<その他の病害虫>

ビッグベイン病

1月中旬の巡回調査では、志太榛原地域で発生が確認され、平均発病株率 3.1%（平年 1.7%）と平年より多い発生であった。本病は土壤中に生息する菌によって媒介される土壤伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壤中のウイルスを保毒した媒介菌を少なくするように心がける。

灰色かび病

1月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年発病株率 0.3%）。降雨が多く、トンネル内の湿度が高くなると発生しやすくなるため、換気に努め、予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。また、被害株は菌の繁殖場所となるので発見しだい抜き取り、ほ場の周辺に放置しない。

菌核病

1月中旬の巡回調査では、本病の発生は確認されなかったが（平年発病株率 0.2%）、トンネル内の温度上昇と過湿により発生しやすくなるため、温湿度の上昇に注意し換気に努める。発病後の薬剤散布では効果が落ちるため、予防に重点をおいた薬剤散布を行う。また、被害株は菌の繁殖場所となるので発見しだい抜き取り、ほ場の周辺に放置しない。

【チャ】

<その他の病害虫>

赤焼病

本病は寒害、霜害によって発生が助長される。幼木園や、つゆひかり、おくひかりなどの品種は特に注意する。初発を確認したら速やかに銅を含む殺菌剤を散布し、その後発生状況をみながら追加防除する。

チャトゲコナジラミ

チャトゲコナジラミの発生が確認されている茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を

対象に防除を行う。幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くようにていねいに散布する。マシン油乳剤を散布すると赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の発生が心配される茶園では、マシン油乳剤の1週間前までに、銅を含む殺菌剤を散布する(マシン油乳剤との混用散布は、殺菌剤の効果を著しく低下させるため行わない)。

3. 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成28年1月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月23日から2月22日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪の日が少ないでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、少ない確率50%です。週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	40	50
1か月	降水量	20	30	50
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	20	50	30
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 1月23日(土)～2月22日(月)
- 1週目 : 1月23日(土)～1月29日(金)
- 2週目 : 1月30日(土)～2月5日(金)
- 3～4週目 : 2月6日(土)～2月19日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成28年1月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 2月から4月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。
 2月 平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪の日が少ない見込みです。気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。
 3月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多い見込みです。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
 4月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			2月			3月			4月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	30	50	20	40	40	20	30	50

【降水量】

3か月			2月			3月			4月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
20	30	50	20	30	50	20	40	40	20	40	40

※参考資料

【静岡県の平年値（1981年～2010年）】

	平均気温（℃）			降水量（mm）		
	2月	3月	4月	2月	3月	4月
浜松	6.5	9.7	14.7	78	149	168
静岡	7.3	10.3	14.9	103	217	210
三島	6.3	9.5	14.4	88	164	149

*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※季節予報利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い（少ない）ことを意味します。

4. お知らせ

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--

平成 27 年度 技術情報第 5 号
レタスべと病

平成 28 年 1 月 27 日
静岡県病害虫防除所長

県内でレタスべと病が多発しています。

1 発生状況

1 月中旬に行ったレタスの巡回調査では、べと病の平均発病株率は 8.7% (平年 1.2%)、発生面積率は 60% (平年 13%) と平年より多い発生であった。特に、中遠地域では、平均発病株率 14.8% (平年 1.3%)、発生面積率 75% (平年 16%) と平年より非常に多い発生であった (表 1)。

2 発病条件

本病の病原菌は、発育適温 10~15℃と比較的低温を好む。また、胞子のう形成は湿度 90%以上が最適であり多湿条件下で発生が助長される。気象の 1 か月予報では、今後の気温は平年より高く降水量は平年より多いと予想されるため、感染・発病に好適な条件が続く可能性がある。

3 防除方法

- (1) 育苗期の発病株が伝染源になるので育苗期の防除を徹底し、発病株を本ぼに定植しないよう苗を厳選する。
- (2) 育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では、発生が認められなくても薬剤を予防的に散布する。この場合、薬剤が葉裏まで十分付着するように丁寧に散布する。また、初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する (表 2 参照)。
- (3) 多湿条件で蔓延しやすいため、トンネル内部が過湿にならないよう換気に努める。
- (4) 周囲への感染拡大を防ぐため、被害株や被害残渣は早期に取り除き、ほ場外で土中深くに埋める。

表 1 レタスべと病の発生状況

	志太・榛原地域				中遠地域			
	11 月	12 月	1 月	2 月	11 月	12 月	1 月	2 月
発病株率 (%)	0.0 (0.04)	2.4 (1.0)	1.7 (1.2)	— (0.1)	0.0 (0.4)	0.8 (2.1)	14.8 (1.3)	— (—)
発生面積率 (%)	0 (2)	11 (6)	43 (12)	— (5)	0 (2)	30 (12)	75 (16)	— (—)

1) () 内は平年値、—は未調査であることを示す。



図1 ベと病の葉表の病斑（黄色～褐色で葉脈に囲まれている）

図2 葉裏に形成された白色粉状の孢子

表2 レタスべと病の主な防除薬剤

商品名	使用方法	希釈倍数	使用時期	耐性菌発生リスク	本剤の使用回数
<u>アミスター20フロアブル</u>	散布	2000倍	収穫7日前まで	高	4回以内
ライメイフロアブル	散布	2000倍	収穫3日前まで	中	3回以内
ランマンフロアブル	散布	2000倍	収穫3日前まで	中	3回以内
キノンドー水和剤40	散布	600倍	収穫21日前まで	低	5回以内
ダコニール1000	散布	1000倍	収穫14日前まで	低	3回以内

- 1) 下線の薬剤は治療効果が期待できる剤。
- 2) 静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) に掲載されている薬剤から抜粋（平成28年1月25日時点 JPP-NET 配信データによる）。耐性菌発生リスクは、薬剤系統別耐性菌発生リスク（殺菌剤耐性菌研究会）から抜粋。農薬はラベルを確認し使用すること。

問い合わせ先：静岡県病害虫防除所（TEL：0538-36-1543）

病害虫防除所 HP（URL）：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫防除基準 HP（URL）：<http://www.s-boujo.jp/>

平成27年度 技術情報第6号 レタス腐敗病等による腐り玉

平成28年1月27日
静岡県病虫害防除所長

レタスの腐り玉（腐敗病等）の発生にご注意ください。

1 発生状況

腐り玉の主な原因である腐敗病は、結球葉の中肋や葉縁が褐変したり、外葉全体が腐敗し、病斑部が乾くと表面は褐色の紙のようになる病気であり(図1)、例年気温の上昇とともに発病が増加する傾向にある。

1月中旬に行ったレタスの巡回調査では、腐敗病の平均発病株率は2.0% (平年0.3%)、発生面積率は27% (平年7%)と平年より多い発生であった(表1)。

2 発病条件

腐敗病の病原細菌がレタスに侵入するのは強風雨や凍霜害などによって生じた傷口からで、高温多湿条件下で蔓延しやすい。1月24日、25日の寒波により凍霜害を受けたほ場では、病原細菌に感染しやすい状況となっている。また、気象の1か月予報では、今後の気温は平年より高く降水量は平年より多いと予想されるため、発病に好適な条件が続く可能性がある。

3 防除方法

- (1) 腐敗病の発病は主に結球期以降であるが、結球前から薬剤による予防散布をして葉面の病原細菌数を減らす。また、初発生を確認した場合や、強風を伴う降雨、凍霜害にあった場合は速やかに薬剤防除を行う。複数回散布する場合は、耐性菌の発生を防ぐため、薬剤をローテーション散布する。(表2参照)。
- (2) 多湿条件で蔓延しやすいため、トンネル被覆後は換気に留意し、内部が多湿にならないようにする。換気に際しては、風下側の片側換気を行うなど、風当りによる葉の傷みに注意する。
- (3) 腐敗病に感染した場合、輸送中に腐敗が進行することがあるので、収穫株はよく選別して出荷する。
- (4) 周囲への感染拡大を防ぐため、被害株や被害残渣は早期に取り除き、ほ場外で土中深くに埋める。
- (5) 腐り玉の原因としては、腐敗病以外にも生理的な腐敗や灰色かび病等による腐敗もある。



図1 レタス腐敗病（結球葉の外葉全体が腐敗している）

表1 レタス腐敗病の発生状況

	志太・榛原地域				中遠地域			
	11月	12月	1月	2月	11月	12月	1月	2月
発病株率 (%)	0.0 (0.04)	5.0 (0.0)	2.9 (0.4)	— (0.4)	0.0 (0.1)	1.2 (0.1)	1.2 (0.1)	— (—)
発生面積率 (%)	0 (2)	56 (0)	43 (6)	— (14)	0 (3)	70 (2)	27 (7)	— (—)

1) () 内は平年値、—は未調査であることを示す。

表2 レタス腐敗病の主な防除薬剤

商品名	使用方法	希釈 倍数	使用時期	耐性菌発 生リスク	本剤の 使用回数
<u>カスミンゴールド又は 銅シン水</u> 和剤	散布	1000倍	収穫7日前まで	中～高	4回以内
<u>スターナ水</u> 和剤	散布	2000倍	収穫7日前まで	中～高	2回以内
キノンドーフロアブル	散布	800～1000倍	収穫21日前まで	低	5回以内
ドキリンフロアブル	散布	800倍	収穫21日前まで	低	5回以内
ジーファイン水和剤	散布	1000倍	収穫前日まで	低	—
ベジキーパー水和剤 (生物防除剤)	散布	1000倍	発病前から発病初期	—	—

1) 下線の薬剤は治療効果が期待できる剤。

2) 静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) に掲載されている薬剤から抜粋(平成28年1月25日時点 JPP-NET 配信データによる)。耐性菌発生リスクは、薬剤系統別耐性菌発生リスク(殺菌剤耐性菌研究会)から抜粋。農薬はラベルを確認し使用すること。

問い合わせ先：静岡県病虫害防除所 (TEL：0538-36-1543)

病虫害防除所 HP (URL)：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病虫害防除基準 HP (URL)：<http://www.s-boujo.jp/>